



トキはなぜほろんだの

すむ場所がへった

トキは、人家の近くの林や森をすみかにし、小川や田んぼの、カニやドジョウなどをえさにしています。人口がふえるにつれて、トキのすみかが少なくなったのが主な原因です。

農薬が、トキのえさをうばった

農薬も、トキを殺した大きな原因の一つです。水田で毒性の強い農薬や除草剤が多く使われた1950年ごろには、水田のカニやエビなど、トキの食べ物が少なくなったのです。また、農薬でよごれたえさを食べるため、薬の毒が、トキの体内にたまっていきました。毒で弱ったトキの産んだ卵は、ひなが、かえらないことが多くなりました。

毒は、生物の体内でこくなる

農薬や水銀、カドミウムなどの有毒物は、生物の体の中に残ります。水中のごくうすい毒も、食物連鎖で小動物から大型動物になるにつれ、こくなっていきます。たとえば、ミジンコ、こん虫、貝、魚、カニ、トキと食べられていくうちに、食べる側の生物の体内に毒がたまっていきます。ときには、水中の1万倍以上もの「毒のこさ」にもなります。

最後の1羽

日本のトキは、1998年現在、石川県に最後の1羽が残っているだけです。「きん」と名付けられたこのトキは、30歳（人間でいえば90歳以上）をこえています。中国にもトキは、わずかな数しか生き残っていません。現在、最後のトキが死んだら、その体の組織を冷凍保存などして、遺伝子技術が進んだ将来、保存した遺伝子（親の性質や体質を伝えるもの）から、トキを復活させようとする計画が始まっています。しかし、いちど、ほろびた野生動物は、もう、もどってこないのです。（敬修・企皇 中田）

